



『答えを、星にゆだねない。』

占星術師が見つけた、自分の人生と天職の育て方

ほしゆみ 著 / 和音書房 発行

2026年9月下旬刊行予定・本文冒頭抜粋

この資料について

本資料は、刊行予定の書籍から冒頭6ページ分を抜粋した参考資料です。著者取材、書評、紹介記事の検討にご利用ください。

書籍概要

書名	答えを、星にゆだねない。
サブタイトル	占星術師が見つけた、自分の人生と天職の育て方
著者	ほしゆみ
発行	和音書房
判型	四六判
刊行予定	2026年9月下旬

利用上のお願い

刊行前の原稿のため、最終版では表現や構成が変更される場合があります。本文の転載を希望される場合は、掲載範囲と媒体名を和音書房へ事前にご相談ください。書影を掲載する場合は「刊行前表紙案」と明記してください。

公式ページ: <https://wawonbooks.com/books/hoshiyumi/>

はじめに

Reader原稿 ページ 1 / 6

私は、ほしゆみという名前で活動する占星術師／キャリアコーチです。日用雑貨品メーカーで営業職として働いたのちに独立し、女性向けキャリアセミナーの講師を経て、占術家として活動してきました。これまでの鑑定はのべ六千人、養成講座は十六期。現在は人材派遣会社でも働くパラレルキャリアを続けています。

その間、十二星座それぞれのKindle本を書き、メルマガでも長く言葉を届けてきました。星を読む仕事を通して向き合ってきたのは、人の仕事や生き方の迷いです。

ただ、私が占星術でしてきたのは、未来の正解を言い渡すことではありません。星の言葉を手がかりに、その人が自分の中にある答えへ近づけるよう、問いや見方を手渡すことでした。

もっとも、人の迷いに向き合ってきたからといって、私自身が迷わなくなったわけではありません。会社員、出産、独立、起業、会社の休眠、そして再び組織で働くこと。仕事の形が変わるたびに、私は「これから、どう生きたいのだろう」と問い直してきました。

その間いが、もう一度目の前に現れたのが、四十八歳の五月でした。私は新しい仕事を始め、もう一度「新入社員」になったのです。

新しく入ったのは、企業と働きたい人をつなぐ仕事でした。占星術師として人の相談を受け、講座を開き、自分の会社をつくってきた私が、今度は組織の一員として研修を受ける側になりました。

これまでの経験が、入社した途端になくなるわけではありません。人の話を聴くことも、複雑な情報を整理して言葉にすることも、きっと新しい仕事のどこかで生かせるでしょう。それでも、会社には会社の言葉と進め方があります。そこでは私は新人ですから、覚えることがたくさんあります。年齢や過去の肩書きが、研修を免除してくれるわけでもありません。

人の人生について話を聴いてきた私が、教わる側の席にいる。働き方を一緒に考えてきた私が、働くことを一から習い直している。こうして並べると、少し可笑しくもあります。

人生は、ときどき面白い席替えをします。

それまでの私は、個人で仕事をする時間が長くなっていました。自分で考え、自分で決め、自分の名前で届ける。その自由さも責任も知っています。一方、新しい組織には、役割の分担があり、自分一人では完結しない仕事があります。自分の都合だけでは動かせない代わりに、一人では見られなかった景色を見ることもできます。

どちらが正しいという話ではありません。個人で働くことにも、組織で働くことにも、それぞれの面白さと難しさがあります。私は四十八歳になって、その両方をもう一度、行き来してみることになったのです。

若い頃の入社と違うのは、自分が何を知らないかを、少しは知っていることでした。わからないことを教わるだけでなく、すでに身につけたやり方が新しい場所では通じないことも受け入れなければなりません。長く働いてきた人が新人になる難しさは、経験がないことより、経験を持ったままいったん脇へ置くことにあるのかもしれません。

研修を受けながら何度も思ったのは、やはり人と場所には相性がある、ということでした。

ゆっくり考えてから動く人が、速い判断を次々に求められる場所へ行けば、慎重さが「遅さ」に見えるかもしれません。変化に応じて動くことが得意な人が、決められた手順を崩さないことを大切にする場所へ行けば、その勢いを持て余すこともあるでしょう。

どちらの人も悪くありませんし、どちらの会社も間違っていない。能力があるか、ないかだけでは説明できないものが、仕事にはあります。占星術師として人の話を聴く中で何度も考えてきたことを、私は新入社員の席で、もう一度自分のこととして教わっていました。

「知っている人」から降りてみる

新しい席へ座ることには、楽しさだけでなく、落ち着かなさもあります。

長く仕事をしていると、自分が何を知っているかで安心できるようになります。経験があり、人から相談され、名前の前に肩書きがつく。「私はこれをしてきた人です」と言えることは、社会で働くうえで大切です。

けれど、肩書きが自分を支えてくれるようになるほど、そこから降りるのが怖くなることもあります。

知らないと言う。教えてもらう。初めての仕事に時間がかかる。これまでなら自然にできたことが、別の場所では通用しない。そういう時間には、自分が小さくなったような心細さがあります。私にも、もちろんありました。

それでも、知らない世界がまだあることは、少しうれしいことでもありました。人生の後半に入り、もう新しくなれる部分など、それほど残っていないような気がしていたからです。

若い頃のように、何にでもなれるとは思いません。これまで引き受けてきたものも、守りたい生活もあります。過去を全部捨てて身軽になることが、選び直すための条件でもありません。だからこそ、今の自分を連れたまま、知らない席へ座り直せることに希望を感じました。

新しいことを始めるとき、過去の経験は、役に立つ道具にもなれば、新しいものを見えにくくする眼鏡にもなります。「これは知っている」「前にも似たことをした」と急いで分類すれば、目の前の仕事に固有の意味を取りこぼすかもしれません。一方で、経験をすべて否定して新人らしく振る舞おうとすれば、これまで積み上げてきた自分まで小さく扱うことになります。

持ってきたものは持っていていい。ただ、それだけで目の前を決めつけない。教わる席に座って私が練習しているのは、そういう姿勢でした。

この本が扱うのも、そのような選び直しです。大きく人生を変えなければ、選び直したことになるわけではありません。仕事を辞めることだけが挑戦ではなく、今いる場所で役割を少し変えることも、週に一度だけ別の活動を始めることも、しばらく休むこともあります。反対に、新しいことを始めないと決め、今ある仕事との関係を整え直す選択もあります。

新しい席へ座るとき、過去の経験を捨てる必要はありません。ただ、「私はこういう人だから」と決めていた説明を、少しゆるめる必要はあります。その余白に、まだ知らなかった自分が入ってくるからです。

人の星を読めても、自分の人生には迷う

占星術師なら、自分のことは何でもわかるのでしょうか。

そう思われることがありますが、残念ながら、そんなことはありません。星を読めても、自分のこととなれば、やはり迷います。

- ここまで -

本書の詳細・初版先行予約は、和音書房の公式ページをご覧ください。

<https://wawonbooks.com/books/hoshiyumi/>